



山で採取した野生ランが売られるエルバジェの市場。自然保護区での天然資源の採取は法律で規制されているが、すべてを取り締まるのは難しい状況にある

止まらない不法採取

首都パナマ市から車で西に約1時間半。1000メートルを超える山々に囲まれた、緑豊かな盆地の町エルバジェに到着する。人口は4000人ほど。年間を通して20〜30度という快適な気候のため、避暑地や別荘地として人気が高く、国内外から多くの人々が訪れる。

日曜日の朝、町の市場は観光客や売り子でにぎわっていた。毎週末、ここには周辺の山岳地域に住む人々が、観光客を目当てに野菜や果物、工芸品などを売りに来る。ふと目を向けると、色とりどりのランの花が所狭しと並ぶ店がいくつもあった。「山の熱帯雨林から不法採取された野生のランです。絶滅危惧種もこ



国際協力の担い手たち

COSPA (パナマ野生ラン保護活動)

ランを守り山岳住民の生活を支える

世界的にも貴重なパナマの野生ランが、今、生活のために不法採取する人々によって危機に陥っている。COSPAは人々にランの栽培技術を指導するとともに、エコツーリズムを活用しながら、その保護活動に努めている。



絶滅危惧種のエスピリト・サント。COSPAでは、オーナー制度を設けてこの花の保護を呼び掛けている。最近、パナマの元青年海外協力隊でもあるCOSPAのメンバーが職場で声を掛け、一企業の社会貢献事業として保護に協力するなど、日本でも支援の輪が広がっている



APROVACAのメンバーにランの栽培方法を指導する明智さん

エコツーリズムで知る自然の価値

帰国後、明智さんはAPROVACAの運営を助けるため、日本側の支援組織となるCOSPAを設立。日本からボランティアを派遣し、APROVACAの運営体制を整備したり、保護センターの一部を改修し、栽培中のランを観光客に見てもらえるようにするなど、支援を続けてきた。

そして08年から、COSPAがJICAの草の根技術協力を通じて準備してきたのが、野生ランの保護と山岳住民の生計向上を目的としたエコツーリズム。自然保護区を巡り、多種多様な野生ランを堪能してもらおうという内容だ。住民を雇い、エコツアーガイドとして養成したほか、けもの道同然だった自然保護区の山道を整備し、入山者の監視を行う管理者を配置した。さらに、パンフレットやホームページを作成するなど広報活動にも力を入れた。

発展はまだまだこれからだが、受け入れ体制が整ったことで日本からのスタディーツアーも組まれるようになるなど、今後さらに活



整備された山道を歩くエコツーリズムの参加者



05年、愛知万博で、優れた環境技術を持つ企業やNGOに贈られる「愛・地球賞」を受賞。明智さんも現地のメンバーと喜びを分かち合った

性化が期待できそうだ。保護センターには年間1000人を超える観光客が訪れており、入場料の収入が入るようになり、APROVACAの運営も安定しつつある。そして何よりも、以前はランを採るばかりだった住民の間に、新たな仕事へのやりがいと誇りが芽生えている。

明智さんが初めてエルバジェを訪れてから10年。たくさん日本人ボランティアや現地の人々の助けを得ながら、今も年に一度は両国を往復し、活動を続ける。「ランの保護やエコツーリズムを通じて、自分たちの周りにある自然の価値、そして自然の保護が自分たちの生活に有益であるということに、一人でも多く気付いてほしい」。そんな願いとともに、この地が野生ランの楽園に戻る日のことを、今日も夢見ている。

ここに含まれています」。複雑な表情を浮かべながらそう話すのは、COSPA (パナマ野生ラン保護活動)の明智洗一郎さん。「ランを市場で売って1日に得る収入は、一家の主が別荘番や草刈をして手にする日当の約5倍。貧しい山岳住民にとって、野生ランは生活の糧を得るための簡単な方法なんです」。

国土が熱帯雨林に覆われ、豊かな生態系に恵まれるパナマ。特にランは、このエルバジェと周辺の山々を中心に多くの種類が生育し、その数はパナマ固有種も含め1500以上に上る。だが今、この世界でも例を見ない花の園では、開発によって熱帯雨林の伐採が進んでいるのに加え、長年の山岳住民による採取が原因で、野生ランの個体数が急速に減り続けている。「以前は至る所で見られた花が、最近は市場で見掛けるだけになった」といった観光客や町の人々の声が最近多く聞かれる。

「花を育て、植生地に戻すだけでは不十分。野生ランに代わる別の生計手段を見つける必要がある、そう考えたんです」



APROVACAが運営に当たっている保護センターの入り口。訪れる観光客も徐々に増えている